

卒業生の皆さん、保護者の皆様、本日は卒業大変おめでとうございます。昨年卒業式にも参加し、初めてこちらを訪問させて頂きました。この立教英國学院の素晴らしい立地、自然環境、設備に感銘を受けましたが、何よりも驚いたのは生徒の皆さんが非常に伸び伸びと、明るく、また礼儀正しく振る舞われている様子でした。これも偏に棟近校長先生をはじめとする先生方の卓越した教育理念、指導方針、愛情、そして立教英國学院の長い歴史と伝統の賜物だと思っております。

本日は卒業生の皆さん、特に高校卒業の四三名の皆さんに三つ申し上げたいと思います。これから日本あるいはイギリスの大学進学の道を選ばれる方が多いと思いますが、大学に進まなくても自分達が大変に恵まれた環境で、先生方とご両親の愛情に包まれて勉強をしてきたということを決して忘れないようにお願いしたい、という

立教英國学院は三月七日に卒業終業式を行いました。四名の小学六年生は中学部に進学し、一五名の中学生は三名が高等部に進学。そして今年度は四三名の高校三年生が立教英國学院を卒業しました。

方を知る機会を得ることです。異なった文化、思想、アイデアが存在するということを知ること自体に大きな意味があり、それが皆さん自身を成長させる大きな力になると思います。

私の好きな格言に *De la discussion jaillit la lumiere* があります。

英語に訳すと “*The light comes out from*

三つ目に、私自身の高校時代から今に至る話を申し上げたいと思います。日本は狭い、ともかく外国に行きたい、海外と関わりのある仕事をしたい、外国で生活したいの一心で英語ばかりを勉強していたのが私の高校生活でした。当時の日本はまだまだ高度成長期にあり、言い方を換えますと、海外のものは優れている、日本は外国に追いつかねばならない、学ぶべきところは海外にあるという時代で、いわゆる海外志向の学生が多くいた時代ではなかったかと思います。大学に入つてからは何故かフランス語の勉強をすることになりましたが、私の海外志向は益々強まり、フ

the discussion」——議論から光が滲み出る——という意味です。異なるた意見、多様性の理解、そういう人たちとの交流、議論こそが光、成長につながると私は意訳して解釈しています。現在、大河ドラマで「花燃ゆ」という明治維新前夜の吉田松陰を取り上げたドラマをやっていますが、卒業生の皆さんもこれからある意味、ご両親の庇護を離れ自分の意志と力で自分の人生を切開く、言わば人生の明治維新に向って進んでいかれる段階とも言えるのではないでしようか。そういう大事なタイミングに、ここイギリスの伝統と文化、イギリス人の物事の考え方に対する強制的で偏った思考を幸運だった、ありがたかった、と思われるようになると確信しています。吉田松陰は黒船に乗つてアメリカに密航し勉強することを望んでいましたが叶いませんでした。彼が皆さん的存在を知つたらさぞ羨ましいことでしょう。

ランスに留学までしてしまいました。その一方で、最近イギリスで生活して思うのは日本のことばかりです。日本の経済は丈夫なのか、何故こんなことが日本で起つてしまつたのか、何故イギリスやヨーロッパでできていることが日本でできないのか等々、日本頑張れ、という気持ちが日増しに高まっています。立教英國学院で学ばれた皆さん、将来の日本と英國の架け橋となる素材、候補生です。イギリスの空気を触れ、イギリスの文化に接し、イギリス人に囲まれて学んでこられた皆さんには、日本の国を更に良くするにはどうすれば良いか、イギリスのどういうところを学ぶ必要があるのか、あるいは真似をすべきでない悪いところはどこなのか、焦る必要はありませんが、長い時間をかけて考えていいつて頂きたいと思います。

簡単ではありますが、これで私の祝辞を終えさせていただきます。皆さん、本日は本当におめでとうございます。

— 目次 —

卒業式終業式	1 ~ 5
祝辞	1 ~ 2
卒業生スピーチ	3 ~ 5
退任された先生方	3
合唱コンクール	6
ロンドンアウティング	7
短期交換留学	8 ~ 9
立教特派員レポート	1 0
学期末のミニ外出	1 1
UCL ロンドン大学との進学協定	1 1
第5回 チャプレンより	1 2

欲しいと思います。新しいものを作り出す
ということは、とても嬉しいことです。

本日はみなさんが卒業おめでとうございます。本日はすばらしい天気ですね。これも偏に、卒業される皆さんのがろの行いがいいからではないでしょうか。

私が立教英國学院について初めて知ったのは大学生の時です。当時、田舎の高校から出てきた私は、大学に入つて仲の良い友人 gekitai が立教英國学院の出身だつたのです。彼はびっくりするくらい礼儀正しくて、頭がよくて、英語もできるのです。すごく格好がよくて、女性にも人気がありました。立教英國学院つてどんなところなんだろう、と思いました。

そして昨年、私は初めてこの立教英國

院にお邪魔し、色々とお話を伺い、校長先生をはじめとする先生方の教育方針が徹底されていることを知り、こういうところで勉強したら、あの友人のような人間に育つのだなと納得いたしました。英語がペラペラで、礼儀も正しく、頭がよく、人柄もすばらしい。これからみなさんは卒業され、大学、社会へ出て行くと思いますが、頃から心がけています。なぜ、立教英國学院の卒業生としての誇りを胸に、大学、あるいは社会で活躍されることをお祈りしております。

本日、私は二点、卒業するみなさんにお伝えしたいことがあります。これは私自身が、私生活の中で、また仕事の中で、常日頃から心がけています。

一つ目は、常に新しいことにチャレンジすることです。みなさん、まだ、おそらく見たことがないもの、聞いたことがないもの、たくさんあると思います。常にチャレンジ精神を持って、挑戦していく



最初から諦めることがないようにしていただきたい、ということです。難しいと思つても、そこで諦めずに挑戦する。ぜひみなさん、最初からダメだと諦めないで、挑戦していって欲しいと思います。この二点をもつて私からの祝辞とさせていただきます。みなさん、本日はご卒業までおめでとうございます。

Ambassador Award 2014

アンバサダー (Ambassador) とは「大使」のこと。アンバサダー賞は、地域との交流を通し、学校の代表としてふさわしい活動を続け、国際交流の分野において日英の架け橋となるような活躍があつた生徒に、毎年地元ホーシャム市議会議長より贈られる名誉ある賞です。今年度は、高等部3年生の山本さん、高等部2年生の小野さん、鈴木さんの3名の生徒にこの賞が贈られました。以下、ホーシャム市議会 O'Connell 議長のスピーチを紹介いたします。

The Ambassador Cup is presented to the Students who have made a significant contribution to improving relations between the UK and Japan.

This year the award will go to three students: Mayu Yamamoto, Risa Suzuki and Mizuka Ono.

For the past three years Mayu has been heavily involved with the School's Japanese Evening – an annual event which introduces Japanese culture to local schools and the community. She also participated in the exchange programme with students from Wolverhampton Girls High School.

Mizuka and Risa have also demonstrated their skills at forming good relations between our two cultures through their participation in the Science Workshop at Cambridge University and Tohoku University last summer. In addition they supported visiting students from Tohoku who attended the workshop, as well as British students attending a briefing weekend here at Rikkyo School before travelling to Japan.



2013年度短期交換留学より

卒業生スピーチ

小六 吉岡 美緒



今から二年前、五年生に進級するときに、私は、立教英國学院の小学部に入学しました。入学する前、初めて全寮制の学校だと聞いたとき、私は少し戸惑ってしまいました。なぜなら私はそれまで、家族から離れて生活したことがほとんどなかったからです。そして実際に立教に来てみると、本当に分からぬことばかりでした。そんな私を温かく迎え、生活の仕方を優しく教えてくださったのは先輩方でした。食事の席では、テーブルマナーや当番のときの仕事の行い方、ドミトリーワークの場所や洗濯日、そしてリネンチエングの仕方を教えてもらいました。

初めは、自分でできないことがたくさんありました。少しずつできることが増え、だんだんと立教での生活に慣れることができました。まだ十分ではあります

せんが、今では自分のことだけでなく、他の人のことにも、気を配ることができます。

うになりました。

この二年間の立教での生活を通して、学び、経験し、身につけてきたことを生かして、私は、中学部へ進んだら頑張りたいと思っています。

一つ目は、来学期に入つてくる新入生の力になろうということです。四月から始まる一学期は、球技大会やジャパンーズドリンク、漢字コンクールやウインブルドン観戦など、たくさん行事があります。慣れてないことやわからないことがいっぱいの新入生の生活について、私が先輩方か

らして、いたいたいたように、しっかりとサボリ組む、ということです。中学生になると、り組む、ということです。中学生になると、立教の算数が数学に変わり、地理の勉強も始まります。今までとは違う教科が始ま

り、学習する内容も増えると思うので、計

画的に物事を考え、時間の使い方も工夫して、より効率的に勉強できるようにしていきたいです。

二つ目は、今まで以上に勉強に真剣に取

り組む、ということです。中学生になると、

立教の算数が数学に変わり、地理の勉強

も始まります。今までとは違う教科が始ま

り、学習する内容も増えると思うので、計

画的に物事を考え、時間の使い方も工夫して、より効率的に勉強できるようにしてい

きたいです。

三つ目は、続けてきた部活動を、これか

らも頑張ろう、ということです。私は立教

に入学してすぐ茶道部に入りました。部活

動紹介で、上手にお点前をしている先輩方

がとても素晴らしい、私もやってみたい

と思つたからです。でも、いざ入部してみ

ると、作法や道具の名前など、覚えなくて

はいけないことがたくさんあって、くじけ

そうになつたこともあります。そんな時

にも、私を支えてくださったのはやはり先

輩方でした。私も、先輩のように、茶道の

素晴らしいを伝えることができるよう

に、中学生部に進んでも、しっかりと活動していき

たいと思います。

最後に、この二年間温かく見守つてくだ

さつた先生方、毎日食事を作つてくださ

った方々、校内をいつもきれいにしてくださ

った方々、本当にありがとうございました。

中学生になつても頑張りますので、これか

らもよろしくお願ひします。

さよなら立教スクール

東 牧雄

これが私の故郷だ

さやかに風も吹いてゐる

あゝおまへはなにをして来たのだと……

吹き来る風が私に云ふ



退職された先生方

今学期をもって、以下の3名の方が退任されました。

東 牧雄先生（国語 40年勤続）、月見 紗枝子先生（英語 2年半勤続）、高野 聰子先生（社会 1年勤続）。長い間ありがとうございました。これからのご活躍とご発展を心よりお祈りしています。



中原中也「帰郷」の一節、初めて高等部三年生を送り出した一九年十二月の終業礼拝、高三を送るスピーチの中で、君たちの戻つてくる場所、旅立つ原点としての立教を、思わずこう引用せずにいられないことがたくさんあって、くじけそうになつたこともあります。そんな時立教が私を教師として受け入れ、四十年、私を教師とさせてくれたのだ」と、しみじみと感じさせられた。

ふるさととは何か、いつでも帰つて来られる場所、いつでも温かく抱きかかえてくれるところ、であるとともに、おまえは何をしてきたのだと叱つてくれる場所でもある。イギリスのパブリックスクールに底流として流れている『自由と規律』が、全寮制というハウスクスの中でつらぬかれて来ているような、そういう教育の原点が立教には脈々と受け継がれているのだと思う。卒業生を送り出すと、送り出したその時のままあの頃を共有できる空間、不思議な教育の現場を私は四十年経験できたこと、感謝に堪えぬ思いで「さよなら立教」と言うことにする。

東 牧雄



中三 後藤 梨乃

二〇一二年
四月私はここ

立教英國学院

に来ました。こ

こへ来るまで
私は、ただ「立
教」という学校
が好きで立教
英國学院のDV
を見たり

していました。

そんな私は、勉強が嫌いで地理なんかの宿題は一つも出していないくらいだったのですが、イギリスがどんなところかも分からないうま、ここ立教英國学院へ飛び込んできました。

入学式の日は、冷たい風で灰色の雲、どうもここは私を快くは迎え入れてはくれないようだと思いました。しかしそんな天候はどうつて変わつてやさしく迎え入れてくれた先輩や同級生、嬉しくてたまなかつたです。しかし私は、自分のことを語ることや表すことが苦手で、立教にすぐに打ち解けられませんでした。そんな私がここに立つて自分のことを語つている理由は、この中学三年間で私は変わつたと思つたからです。ここ立教でいくつもの私に出来された課題を乗り越えてきたからそう思いました。また、今ここでこうしてスピーチすること自体も私の課題であり、挑戦だと思つたからでもあります。

突然ですが、皆さんは大きな目標を持っていますか。私は持っています。他の人にとっては小さいことに感じられるかもしれないですが、私にとっては大きな希望です。それは、人から求められる人になりたいということです。ここ立教では、先生と生徒、みんなが互いを認め合い、支え合つて生活していると思います。ここへ来る前

の私は、自己中心的で求めるばかりの人、求められることがあまり無かつた人でした。でもここへ来て、私は変わることができました。一番のきっかけは、中学二年の時のオープン・デイでした。絵を書くのが得意な私は、背景・看板という仕事を任されました。迫つてくる締切に苦戦している学級委員、私はクラスメイトから助けを求められました。

そこまで大したことだとは最初は思つていませんでした。でも小さなことでもクラスの役に立つ、人の役に立つというのは私の心をきれいにしてくれるのだと思いました。

人を求めるということは、この人だからこそ、という選択行為だと思います。オープン・デイでは「自然からのメッセージ」という東日本大震災で被害を受けた原子力発電所についてという難しいテーマに挑み模造紙部門で一位インパクト部門で二位をいただくことができました。難しいテーマだつたので悩んだこともあります。そんな時悩みを真剣に聞いてくれた先輩、仲間、先生方に感謝の気持ちでいっぱいです。高校生になつたら、そんな頼れて求められる先輩となり、みんなの役に立てる人になりたいです。

今まで相談に乗つていただいた先輩方、三年間担任をしていた金子先生やその他の先生方、元気づけて支えてくれた後輩のみんな、ありがとうございました。これからもここ立教英國学院で精一杯頑張つていきたいと思います。



【3学期の行事】

1月 10日	生徒帰寮
1月 11日	始業式
1月 12日	高等部実力テスト
1月 18日	大学センター試験[英語]を全校で実施
1月 24日	全校新春かるた大会
1月 24日～31日	Millais School からの交換留学生滞在
1月 24日	実用英語技能検定 第一次試験(準1級)
1月 25日	聖餐式、実用英語技能検定 第一次試験(2級・準2級・3級・4級)
1月 25日	合唱コンクール
1月 31日～2月 3日	ブレイク
2月 2日	ロンドンアウティング
2月 3日	生徒会役員選挙
2月 8日	第70回漢字書き取りコンクール
2月 22日	聖餐式、実用英語技能検定 第二次試験(1級～3級)
2月 25日～3月 2日	期末試験
3月 7日	卒業終業式
3月 7日～3月 14日	Millais School、Thomas Hardye School にて本校生徒短期交換留学
3月 9日～3月 13日	希望者ホームステイ
	高等部2年生補習



高三一一 宮下 春陽

私がここ立教英國学院に入学したのは、中学二年生の時でした。一学期のハーフターム後という中途半端な時期に入つてきました私は、元からの人見知りがたたつて、自分から生徒の輪に入ることができませんでした。そんな私を、生徒の輪の中に引っ張つてくれたのは、先輩方と四人の同級生でした。そのお陰で私はだんだん他学年の生徒とも接することに慣れていきました。毎日がキラキラ輝いていました。

学を選択した同

級生と高三生との別れの悲しみから、私の日々は色あせていきました。そんな私を変えてくれたのは、新入生を迎えて、よりパワフルになつた同級生たちでした。いい意味で、何をやらかすか分からぬ同級生と過ごす生活は目まぐるしく、あつという間に二年が過ぎ、私は高校三年生になりました。皆と過ごす生活の、別れのカウントダウンが始まりました。

いつまでもこの生活が続いていくと勘違いして、いたせいか、皆との別れを自覚した頃には、もう終業式当日でした。自分の気持ちを整理できぬまま皆とお別れしたが何日も続きました。在学中、先生方に不満を言つて反抗したり、後輩をながしろにしていたのに、思い出すことは楽しかつた日々ばかりで、自分が後輩のことが好きだつたこと、先生方に見守られて、大切にされてきたことをやつと自覚しました。お別れしてから気付くなんて、私は馬鹿だなあと思いました。だから、「立教生活はつまらない。はやく家にかえりたい」と思つてゐる子たちには、ここでの生活は決して窮屈でつまらないことばかりじゃないことを知つておいて欲しい。つまらないと思うなら、何をしても無駄だと最初から諦めないで、楽しいと思えるようになるにはどうしたら良いのかを周りをよくみて考えてみて。自分ひとりで駄目なら、周りの友達や先生方を頼つて一緒に考えてみて。それだけの信頼関係を、皆は築いているでし

けれど、外部進学を選択した同級生と高三生との別れの悲しみから、私の日々は色あせていきました。そんな私を変えてくれたのは、新入生を迎えて、よりパワフルになつた同級生たちでした。いい意味で、何をやらかすか分からぬ同級生と過ごす生活は目まぐるしく、あつという間に二年が過ぎ、私は高校三年生になりました。皆と過ごす生活の、別れのカウントダウンが始まりました。

いつまでもこの生活が続いていくと勘違いして、いたせいか、皆との別れを自覚した頃には、もう終業式当日でした。自分の気持ちを整理できぬまま皆とお別れしたが何日も続きました。在学中、先生方に不満を言つて反抗したり、後輩をながしろにしていたのに、思い出すことは楽しかつた日々ばかりで、自分が後輩のことが好きだつたこと、先生方に見守られて、大切にされてきたことをやつと自覚しました。お別れしてから気付くなんて、私は馬鹿だなあと思いました。だから、「立教生活はつまらない。はやく家にかえりたい」と思つてゐる子たちには、ここでの生活は決して窮屈でつまらないことばかりじゃないことを知つておいて欲しい。つまらないと思うなら、何をしても無駄だと最初から諦めないで、楽しいと思えるようになるにはどうしたら良いのかを周りをよくみて考えてみて。自分ひとりで駄目なら、周りの友達や先生方を頼つて一緒に考えてみて。それだけの信頼関係を、皆は築いているでし





一月二十五日、立教英國学院に素敵な歌声が響きました。全校合唱コンクールです。先学期の最後に曲決めを行い、新学期が始まつたその日から本番当日まで、どのクラスも毎日一所懸命練習してきました。その甲斐あって、学年、人数を問わずすべてのクラスがとても素晴らしい合唱を披露してくれました。



合唱コンクール

高一一二 柏樹 健生

学年最後の行事、合唱コンクールが行われた。皆は略して「合唱コン」と呼ぶ。

日本の学校によくある行事だが、この学校の記念すべき第一回は二年前の三学期だった。今年三回目の僕からしたら、ああまたかと思い、嫌だなあと正直思つていた。「合唱コンなくなれ」という声が聞こえてくる。その度に僕はそうだな、昨年などと変わらない行事なのだろう、と思う。

クラスの曲は『栄光の架け橋』に決まりた。その理由も、誰が出した案かも誰も覚えていなかつた。ただ一つ覚えているのは、曲決めの話し合いは皆真剣だったことだ。

冬休みを経て、三学期になる。三学期が始まつて三日程して練習が始まつた。忙しいのにと思い、面倒だと思う。毎年のことだ。練習が始まつた。最初はまだ時間があると思い、適当にやる。僕らの俗に言う鉄板である。

そう思つていた矢先、いざ練習が始まつてみると、三日後、いや、明日が本番であ

るかのような練習だつた。皆が真剣に音と楽譜に向き合つてた。皆の心の中に優勝という文字があるのがひと目でわかつた。嬉しかつたというよりは、皆について行けるかという焦りの方が僕には大きかつた。僕は歌は好きだが、自信はない。だからこそ、僕は僕なりに不安を解消できるよう練習をした。こんな不安は僕にとって初めてだつた。

練習を重ね、本番前最後の週末が来る。その時にはもう僕の不安は無かつた、と思う。初めて別々のパートで練習していた僕たちが一緒になつて歌えるときが来たのだ。感想はまだ一週間前なのに良くできいいると思っていた。僕と同じ考えの人は多かつたはずだ。でも、やはり不満はいっぱいあるようだつた。その日から皆の色々な意見が出て、アレンジするようになつた。

僕はというと少し、いやかなり余裕が出てしまつた。練習時間にも、だらだらと歌つているだけだつた。最悪だ。

本番の日を迎える。リハーサルには僕の気スイッチは入つてた。そのせいか、リハーサルで歌う度に完成度は上がつていつた。夜を迎える。この時のために皆は三学期の初めから頑張つてきたのだ。精一杯のことをしてきた、と言えば嘘になる。僕は思う。けれども、頑張つてきたのは事実だ。『栄光の架け橋』にある「いくつも

美しい歌声が静かな教会に響き渡つた 『栄光の架け橋』

二月一五日、地元ラジウイック教会の日曜礼拝で、高等部一年二組全員で合唱を披露しました。

二月一五日、地元ラジウイック教会の日曜礼拝で、高等部一年二組全員で合唱を披露しました。と交代で各クラスが参加しています。今週は高等部一年二組の番。今回の礼拝では、英語での聖書朗読を立教の生徒が担当することになつていました。それに加え、今回は更に特別。礼拝の最後にクラス全員での合唱を披露する機会を設けていただきました。

高等部一年二組の合唱、『栄光の架け橋』は全校合唱コンクールで惜しくも優勝は逃したもの、多くの人を感動させ、高い評価を得てしました。クラスの生徒たちにとつても大きな経験になつたようで、コンクール後に集めた作文には、「このクラスで良かった」「最後に団結して力を發揮することができた」と書かれたものが多くありました。



一方で、今年度の行事は全て終了、二ヵ月後には新年度のクラス替えでメンバ

まつた。最高だつたと皆が日々に言つていいました。そこから歌つたり、騒いだりしたが、とても楽しかつた。二組皆が団結していく、誰もが満足している顔が見られて、本当に良かつた。今まで何度も二組で良かつたと思う瞬間はあつたが、これほどまでに思つたことはなかつた。最高の思い出だつた。

果たして結果はどうなのだろう。いや、どうでも良いのだ。優勝なんて高二にあげてやる。僕らにはそんなものよりも、「いくつも日々を越えてたどり着いた今がある」ではないか。



まつた。最高だつたと皆が日々に言つていいました。そこから歌つたり、騒いだりしたが、とても楽しかつた。二組皆が団結していく、誰もが満足している顔が見られて、本当に良かつた。今まで何度も二組で良かつたと僕は歌は好きだが、自信はない。だからこそ、僕は僕なりに不安を解消できるよう練習をした。こんな不安は僕にとって初めてだつた。

はバラバラになつてしまつという名残惜しさも、クラスの雰囲気からひしひしと伝わつてきました。そのような中、もう一度皆で歌える願つてもない機会を与えられ、生徒達の意氣は昂揚していました。礼拝当日。お祈りが一通り終了してから、いいよ出番となります。『栄光の架け橋』はもちろん日本語の歌です。そこで日本語の歌詞の英訳を、訪れたイギリス人の皆さんに配布しました。

ピアノの音色とともに、美しい歌声が静かな教会に響きました。合唱コンクールでも燃え尽きることがなかつた生徒達のエネルギーが、礼拝に訪れた人々に伝わつたようでした。

終わつた直後、予想していなかつた光景を観ることができました。聞いてくださつた皆さんの温かい拍手とスタンディング

オベーション。イギリスのミュージカルを鑑賞しているときなどに目にすることはあります。生徒達自身がこの最上級の賛辞を受け取つたのは、ほとんど初めてのことだつたのではないでしようか。もう一度みんなでこの歌を歌うことができた。ラジウイックの村の人たちと心が通つた。もうこれ以上は増えないと思つていただけた。高校一年生の思い出が、またひとつ追加されました。

三学期のアウティングはロンドンへ出掛けます。小学部、中学部はサイエンスミュージアムへ、高等部は進学協定を結んだUCLロンドン大学へ。夜は、中学部三年以上の生徒はミュージカル鑑賞をします。楽しく学びのあつた一日となりました。

ミュージカル「ウイキッド」
高一一 末永 悠貴

英旗

僕はミュージカルが好きだ。特に宝塚が好きだ。「宝塚は実力不足」とか「お前はオタクか」とか言う人がいるが、そんな人は本当の宝塚を知らないだけだ。

宝塚の話はここまでにして、とりあえず僕はミュージカルを見るのが好きだといふことは分かつていただけただろう。僕は母親がミュージカル好きだということもあって、生まれたときからミュージカルの音楽を聴き、そして歌つていた。声変わり



して音域が狭くなってしまった今は、歌うことがあまり好きではなくなってしまったが、音楽を聴くことなら今でも大好きだ。僕が持つていてる音楽プレイヤーの中にも、ミュージカルの音楽が多く入っている。だからそんな僕にとって、三学期のアウティングは楽しみで楽しみで仕方ない行事のひとつであった。

今回のアウティングで見たミュージカルは「ウイキッド」。僕は、この作品の内容は今回のアウティングがあるまで全く知らなかつた。知つているとすれば、「緑色の魔女が出る」ということくらい。しかも以前、「ウイキッドはミュージカルとしてはイマイチな内容」という噂を聞いた事があつたので、今回は楽しみにしてた反面、「ウイキッドなんか見て楽しいのかな」という気持ちがあつた。ところがこの作品は、こんな僕の心配をどこかへと吹き飛ばしていった。

この作品は、かつては友達だつた悪い魔女「エルフアバ」と良い魔女「グリンダ」の二人の魔女を中心進んでいき、「世界を敵にしてたつた一人を愛した」エルフアバと、「たつた一人を失つて世界から愛された」グリンダという対照的な二人の選択と、その心の葛藤を描いた作品である。その迫真的演技、圧倒的な歌の力が作り出しぬ思議な世界に、僕もどんどん入りこんでしまつた。

今回のミュージカル鑑賞で、僕にとっていい刺激となつたことは二つ。一つ目は、「英語で見ることができた」ということ。最初は聞き取ることで必死だつたが、だんだんと耳が慣れていき、途中からは英語のジョークに笑えるようになつていて。見終わつた後、「英語を聞き取れた」という自分への満足感もあつたし、非常に良い英語の練習となつた。もう一つは、主人公等の「女性」の演技と歌に刺激を受けた。日本の「宝塚」や「東宝」のミュージカルでよ

く見られるのは、どちらかというと裏声を多く使う「美しい女性」だ（そうでない場合ももちろんあるが）。だから今回のよくな、「力強く」、「感情をむき出しにする」ような歌、演技は僕にとってはとても新鮮で僕も体の内側からなにかジワジワと来るものがあつた。それはミュージカル好きのぼくにとつてはたまらないものであつた。今回のアウティングは非常に有意義で、思い出に残るようなものになつた。来年は何を見るのだろうか。とても楽しみである。



～短期交換留学体験記～



Millais and Rikkyo Exchange Programme

24th January - 31st January, 2015



参

校内を案内している最中に、他のメンバとも自己紹介をしたのですが、会話はあまり弾みませんでした。度重なる沈黙は話を考えさせるきっかけとなりました。しどんなに頑張つて考えてみても、英人子でも楽しんでくれるような「ネタが浮かばずに、食事の席でも静けさがやつくる度に焦りを感じていました。

日がたつにつれて、一緒にプログラムに参加している生徒たちは、バディと徐々に

一月二十四日から、地元ホーリシャムにあるミレー・スクールの生徒十名が立教英國学院に短期交換留学にやってきました。最初はお互いに緊張した様子のミレー生と立教生でしたが、それも束の間、みるみる距離が縮まって、きみこ。

今回、ミレー・スクールとの短期交換留学プログラムに参加してたくさんのことを学びました。その中で最も印象的なことを書きたいと思います。

初日、顔合わせで、ミアという私のバディの子と簡単な自己紹介をした後、あまり深く考えずに握手をしようと右手を差し出しました。すると彼女はそれを抱擁と取扱って、つまづいてしまったのです。

ダンスのパフォーマンスが披露され、夕食後の食堂は大いに盛り上がりました。発表している生徒達から、一週間の間にバディー同士が心通わせる仲になつたことがひしと伝わってきました。

一週間はあつという間に過ぎ、さびしい別れの時がやってきました。最初は話題探しが必要だつた仲が、今では共通の話題がたくさんでき、話し足りないほど。次に会う約束をしてミレー生は帰つていきました。春には、立教生がミレー・スクールにた。短期留学をします。

今振り返ってみると、最初にあまり話せなかつたのは異文化や英語への恐れが理由だつたのではないかと思います。そして

こんな私なんかのために、何もしてあげられなかつた私に手紙を書いてくれたこと、それは私の心に溢れていた申し訳なさを後悔に変えました。もつと話しかけてみればよかつた、もつと仲良くなりたかつたあまりの後悔に涙が止まらなくなつた私を、彼女は優しく抱きしめてくれました。その時のハグは、最初のぎこちなさとはかけ離れた、友人同士のハグだつたと思います。

いたちの言葉を聞いて、「私はバディの子に『離れたくない』と思えるだけの何かをしてあげられただろうか」と、ふとおもいました。答えはすぐに出ました。そんなはずない。何にもしてあげることができなかつた。きっと初めてここに着いた時、向こうも緊張していたに違いない。けれど、そんな彼女に私は何もしてあげられないかった。心の中から申し訳なさが溢れていました。そんなとき、突然、彼女たちはドミニトリーカラ何かを持つてきました。それは手紙でした。そこには大きく「私のバディになつてくれてありがとう」と書かれていました。

打ち解けていき、食事中の盛り上がりは隣のテーブルに聞こえるほどで、時々怒られたりもしましたが、皆それぞれのバディとなりました。そんな中、ミアと私の会話は相変わらず弾まないままでした。

彼女たちが帰る前夜、何かして遊ぼうと言つていたのですが、ミレーの子からの提案で「おしゃべり」をすることになりました。最初はみんなで写真を見せ合つたり、歌つたりして楽しく過ごしていましたが、お別れの時間が近づくにつれて、次々に泣き出す子たちがでてきました。「離れたくない」と言つて泣いていた子たちが、やがて

今回の交換留学プログラムは、「英國に住んで六年目になるし、異文化への恐れなんてもうとっくになくなっているものだ」と思い込んでいた私が、未だにそういつた恐れを抱いていたことと、そんな恐れは早く捨ててしまつたほうがよい、ということに気づかせてくれました。

この後悔、悔しさをバネに、次に交換留学でミレー・スクールに行くときは、人一倍皆としやべつてミアと仲良くなりたいと思ひます。



短期交換留学

高一ー 今田 宇咲

私はこのプログラムに参加することを希望したとき、かなり不安でした。正直、希望したことを後悔したこと何度もありました。その理由は、やはり英語を話す自信がなかったということだと思います。結局、私はそんな不安を抱えたまま、ミレー・スクールの子との一週間の生活を迎えることになりました。第一印象、人をこれで判断するのは良くないと思いますが、やはりこれは大切だと思います。私はバディの子に笑顔で挨拶をしました。今思うと私はミレーの子達と過ごした一週間は、いつも以上に笑顔でいられた気がします。それはもちろん、彼女たちが楽しませてくれたということもあります。私がとつて相手に対し笑顔でいるということは、ひとつの礼儀だと思うからです。相手が自分と話している時、表情によつては相手を不安な気持ちにさせてしまうかもしれません。そのほうがきっと相手も話しやすいし、多少は樂になるのではないかと思います。実際に、ミレーの子達も笑顔でいてくれたので、私も積極的に接することができました。

ミレーの子達と一緒に生活する日々は、私にとって、数年間の立教英國学院での生活に新しい風が吹き込んできたようでも、とても新鮮で魅力的でした。しかし、彼女達は普段の私達の生活の忙しさに驚いていました。ミレー・スクールの話を聞いてみると、生活はもちろん、他にも設備や食事など様々な点で違いがありました。私はミレー・スクールに行つた時、かなりの衝撃を受けた一週間により、今はその気持ちが期待に変わりました。

私のバディたつた子はとてもフレンドリーで、いつもなら私は自分から喋らなきやと焦つてしまふのですが、向こうからも沢山喋りかけてくれたので、会話をかなり

盛り上げることができました。少し日本語を教える機会ありました。彼女が私に英語を教えてくれた量のほうがはるかに多いと思います。

ミレー・スクールの子達は日本が大好きで、日本語を一生懸命に勉強しているようでした。が、やはり、かなり難しからしく、自分の言葉が日本語である私たちがうらやましいと言つていました。私にとつては多くの世界で使われる英語が喋れる彼女達のほうがうらやましいと思いました。

この一週間で私は、英語に前より自信が持てるようになつただけではなく、彼女達が日本の魅力について沢山語つくれたため、改めて日本語の美しさ、人柄の良さ、文化の素晴らしいところを誇りに思いました。

春には、私がミレー・スクールに行きいろいろなことを吸収しなければなりません。私がこのプログラムに参加した理由は、主に英語が喋れるようになりたいということでしたが、今は、それ以上に一人の生徒としてミレー・スクールに通い、新しい環境で、人との関わり合いや発見により自分を成長させるということです。もう語学の勉強のためだけではありません。私は今回の一週間での経験、これからの一週間での経験を無駄にせず、日々精進したいと思います。

Rikkyo is a wonderful environment I wish I could stay longer. Everyone is so welcoming and kind I've had a very funny and interesting time. Thank you so much!

I absolutely loved my stay here and felt so welcomed. On the last day we were all very upset and didn't want to leave. It was a once in a lifetime experience and I would do it all over again!

Message from the Millais

I have had a wonderful week staying at Rikkyo. The school is very different to my own and in my opinion, better. The school has a great sense of community and we were welcomed into the school immediately and looked after by everyone.



I am very grateful to everyone at Rikkyo for being welcoming, friendly, kind and making us all feel at home. I didn't want to leave!



I really enjoyed my stay at Rikkyo as there was a lot of time to make friends in lessons. I also enjoyed cooking the green tea cookies as they were delicious and now I want to make some myself!

学期末のミニ外出

3学期の終わり、小学部、中学部1年は立教の近くにあるSouth Downsの丘へ外出しました。車の中では大きな声を出して楽しそう。少し時間が経つと期末試験の疲れもあってか眠ってしまう子もいました。

車で丘の上へ登ると、「わあ、きれい！」「こんな景色、日本じゃ見られないよ」と感動し、隣で寝ている友だちを起こす姿も。天気に恵まれたこの日、丘の上からは遠くの景色まで眺めることができました。車から降りると少し風が強く感じられましたが、坂道、細い道、草や馬糞で足場の悪い道、そういういたものを気にする様子もなく、楽しそうに歩き走り回ります。ちょうど良い丘を見つけるとみんなでジャンプをして写真撮影。「ポイントは足を曲げて飛ぶことだ」と先生に言われ、みんなで息を合わせてジャンプ！まるで空を飛んでいるかのような写真が撮れました。

丘から帰る時間になると「もう帰っちゃうの？」とまだまだ遊びたい様子。歩くことに疲れたり、土で汚れることを嫌がる様子もありませんでした。帰りに寄ったカフェではそれぞれ英語をつかって注文。クラスメート、他学年、先生と楽しそうに丘で時間を過ごす姿は正に大家族。すっかり春らしくなったこの日、イギリスの大自然と共に1年間の子どもたちの成長を感じました。



UCL ロンドン大学と進学協定を締結しました



1月14日（水）、UCL ロンドン大学(University College London-ユニバーシティ・カレッジ・ロンドン)のCLIE(Centre for Languages & International Education-国際教育センター)にて、立教英国学院とUCL-CLIE間の進学協定の調印式を執り行いました。UCLは、オックスフォード、ケンブリッジに次ぐイギリスで3番目に古い大学で、世界大学ランキングでも常に上位に位置するトップクラスの大学です。29名ものノーベル賞受賞者を輩出しています。150年前に伊藤博文をはじめとする長州ファイブが日本から初めて留学し、その後の日本の近代化に大きく貢献したことでも知られており、今年のNHKの大河ドラマの舞台となることでも現在注目を集めています。

この協定により立教英国学院の生徒で在学中に一定以上の成績を修め、規定の英語資格を取得した者はUCLのUPC(Undergraduate Preparatory Certificates-学士入学準備コース)へ推薦される権利を得ます。UPCは1年コースで、修了後はUCLの各学部へ進学が可能です。イギリスの学士コースは3年間ですので、合計4年間で学位を取得することができます。合わせて、今後立教英国学院はUCL国際教育センターと生徒の語学研修などでも教育連携を図っていくことが確認されました。また、協定締結に伴い、2015年度より教育課程に英国大学進学コースを設置し、イギリスをはじめとする海外の大学への進学を積極的にサポートしていく予定です。提携先の大学も今後順次拡大していきます。



第5回

チャップレンより



林チャップレンは立教英国学院の学校付き牧師です。礼拝や聖書の授業にはさまざまなお話をくださいます。

挫折の向こうにある喜び
チャップレン 司祭 林 和広

少し肌寒いながらも晴天に恵まれた三月七日、本年度の卒業式が行なわれました。四三名の高校三年生が本学院を旅立ちました。今回で二度目の卒業式礼拝の司式をさせて頂きましたが、その中で印象に残ったのは本学院理事である今井理事(伊藤忠欧州会社社長)の祝辞でした。学生時代にフランス留学をし、長年、仕事を通して世界中を旅し、現在はロンドンを拠点にして仕事をしておられる今井理事は、今でも海外での生活における苦しみや日本への望郷の念があるという体験を語りながら、今の苦しみの先にある喜びについて語つて下さいました。

遠藤周作の「留学」という三本の短篇が収められた小説があります。カトリック教徒の遠藤氏自身のフランス留学体験が反映されているようですが、理想や希望を胸に抱いて、ヨーロッパに留学した三人の日本人が、言葉の壁、文化・慣習の違いからくる葛藤、その他様々なことに直面し、理想と現実の狭間で苦しみ、挫折していく姿が描かれています。海外で生活する機会を通して何度もこの小説を読み、自分の体験と重ね合わせていました。

私はこれまでに二度留学の機会を頂きました。一度目は大学二年の頃の米国短期留学、二度目は七年前の英国留学です。最初の留学は大学での前期の単位取得のためでした。日本人からの同級生も多く、さほど寂しさや苦しさを感じることはありました。しかし、一度目の英国留学は聖職志願し、司祭(牧師)になるための準備としての英国留学でした。歴史のある修道会によって創設されたアカデミックな神学校でしたが、周りは英国人ばかりで日本人は自分だけの修道院内にある寮生活、厳しい規律と学問生活は挫折の連続でした。神学用語の風に翻弄される日々であり、食事の席でも授業の続きで盛り上がる神学生達の英語やその他、彼らの話すジョークもわからず、溜息を漏らす日々でありました。最初の学期に「はつきり言つて、今のおなたにはここで学問は無理だ」と言われたことは今でも覚えていました。留学前に聞いた色々な留学生の成功談とはまったくかけ離れた自分がそこにいて、自分のこの英国での時間は何なのだろうか、意味があるのだろうか、と思いつきました。日本が恋しいと毎日思つていました。海外に憧れる日本人から見れば、英国留学をする、英国で生活することは、非常に恵まれているようによく映るでしょう。しかし、留学後、しばらくの間は敗北感しか残つていませんでした。

しかし、今となつては、自分は何に対しで敗北感を感じていたのだろうか、と思います。勉強することとは、自分自身を研鑽させていくためであり、他の人と比べるためではない。親のためでもない。他の期待に答えるためでもない。これまでの自分から新しい自分に変えられて成熟していくためであり、敗北感を感じる必要など全くない、そう思うようになりました。



教会のカレンダーでは今の時期はレント(大齋節)という時期です。十字架の道行きの前に苦悩するイエス・キリストに目を留めます。また、十字架の死によって、イエスという大切な存在を失い、これまでの人生は何だったのだろうかと挫折し、苦悩する弟子たちの姿に目を留めます。そして、その先にあったキリストの復活の恵みを祝い、その恵みに喜ぶ弟子達の姿に目を向けています。

レント(Lent)とは英語で「春」(Spring)の「レンクトン(Lenten)」という語から派生したものと言われていますが、その意味は「春」であり、「草花の芽が」伸びる」という語と同じ語根を持つそうです。わたしたちが体験する様々な苦しみ、挫折の中でも神様は恵みの水、光を注いでいる。人生の中にある苦しみ、挫折には隠された意味があり、苦しみや挫折を通して豊かにされ、成長し、その先にある喜びに与れることができるようになります。また、自分の挫折を通して自分自身を知りました。自分の脆さや弱さを知りました。素直にありのままの自分を認めて、背伸びして生きることから自由になる機会を得ました。苦しみや挫折の中身は異なつても、それによつて失望している人の思いを知ることができます。

皆様の上に神様の豊かな恵みと慈しみが注がれますようにお祈りしております。

遠藤の上に神様の豊かな恵みと慈しみが注がれますようにお祈りしております。

前よりも少しづつ知つていていた單語が増えていました。留学中に読んでいた本を開くと單語の意味の書き込みで真っ黒だらけになつていていました。でも、改めて読みながら理解できるようになります。また、絶えず学び続けることの大切さを知りました。留学中に読んでいた本を開くと單語の意味の書き込みで真っ黒だらけになつていていました。自分のペースで焦らずにコツコツと学んでいけばいい、そう思えるようになります。学習は生涯をかけてするものであり、学院の生徒達も今の結果、成績に一喜一憂せず、目的を持って学び続けて

